様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　5 月　10 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2009～2012
課題番号：21401014
研究課題名（和文）２０世紀前半朝鮮半島北部の地域社会に関する社会史的研究

研究課題名（英文）Social History of Rural Communities in Northern Korea, 1900-1950

研究代表者
板垣　竜太（ITAGAKI RYUTA）
同志社大学・社会学部・准教授
研究者番号：60361549

研究成果の概要（和文）：本研究を通じて、20 世紀前半の朝鮮半島北部の地域社会におけるプロテスタント教会の役割の大きさが分かったとともに、北米の宣教師文書が詳細に地域情報を残していたことが明らかになった。それらと公文書・新聞資料やインタビュー等を組み合わせることで、1945 年以前の地域社会史の多面的な復元が可能となった。また 1945 年以降についても新聞記事や米軍の鹵獲文書などのほか、北朝鮮の民俗学等によって地域社会が照明できることも分かった。

研究成果の概要（英文）： I have made it clear that the protestant churches played a key role in rural communities of Northern Korea during the first half of 20th century, and that the missionary archives in North America kept huge amount of records on local society. Combining such records and the other data such as interviews, official documents, newspaper articles, etc., I can restore the social history of rural communities before 1945 from multiple aspects. As for the era after 1945, it is possible to write the micro-history through local newspapers, the captured documents by the U.S. Army, papers written by North Korean ethnologists, and so on.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,700,000	510,000	2,210,000
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１２年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	4,500,000	1,350,000	5,850,000

研究分野：人文学 D
科研費の分科・細目：地域研究
キーワード：朝鮮半島北部、地域社会、社会史、地域エリート、キリスト教

１．研究開始当初の背景

現在、日本においては、冷静で客観的な北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)に関する研究が強く求められている。通常、北朝鮮研究といえば、1945 年に 38 度線を境界として分断されて以降、とりわけ朝鮮民主主義人民共和国が創建されて以降の政治経済に関わる研究が一般的である。だが、本研究は、あえて 20 世紀前半の時期にフォーカスするとともに、朝鮮半島北部の地域社会に着目するという戦略をとった。地域社会に着目したのは、国家レベルのマクロな研究ではなく、より一般の人々の経験に近いところを明らかにしたかったためである。また 20 世紀前半に絞ったのは、20 世紀後半になると資料的制約が強くなること、また 20 世紀前半の朝鮮半島

北部社会についてはまだ研究蓄積の薄いことが背景にあった。この研究を通じて、今後の実りある北朝鮮研究のための基礎的なデータと視座を提供することを目標に計画を立案した。

２．研究の目的

本研究は、20 世紀前半の朝鮮半島北部における地域社会の変化を、社会史的な観点から実証的に明らかにすることを目的としている。

私は朝鮮半島南部の慶尚北道尚州という地域を対象とし、20 世紀前半における社会変化を 1 冊の歴史民族誌としてまとめた経験を有している。本研究は、それを朝鮮半島北部地域に応用したものである。地域としては市郡レベルのスケールとし、韓国・日本・北米などに散在する資料を収集し、インタビューをおこない、それらを組み合わせることで、地域社会像を浮かび上がらせようとした。

その際には、20 世紀前半における資料が豊富であると同時に、後に 20 世紀後半の研究をも展開し得るような地域を選定することを目論んでいた。

当該地域の研究対象としては、次のような領域を設定した。

(1)20 世紀前半の人口移動と産業構造の変化
(2)近世の地域エリートである士族・吏族の動向
(3)20 世紀前半の地域社会事業、社会運動の主導層の分析
(4)20 世紀前半におけるキリスト教の教会の動向
(5)公立学校・私立学校・書堂・夜学運動を含む教育の変化
(6)在朝日本人の存在様態

３．研究の方法

朝鮮半島北部の地域社会は、現在、現地調査が著しく困難であるため、現地以外にある資料の収集と、当該地域出身者のインタビューを実施した。文献調査としては韓国・日本・米国・カナダなどにある資料を系統的に集め、また新聞の地方記事も収集することにした。インタビュー調査は、韓国や北米などに住む当該地域出身者を対象に実施することにした。

研究の進め方としては、まず第 1 段階として、朝鮮半島北部に関する文献資料を幅広く検討しながら、集中的に調査をおこなう地域を選定する。そのうえで第 2 段階として、当該地域の人口、産業、地域エリート、キリスト教、教育、在朝日本人の動向などについて、韓国・日本・北米などに残された資料をさらに体系的に収集するとともに、聞き取り調査をより集中的におこなうことにした。その上で第 3 段階として、最終的にまとめる、という計画を立案した。

４．研究成果

以上の計画のもと得られた研究成果について、以下、まずは年次別にまとめる。発表論文等に言及する際には、「５」でまとめた雑誌論文(論文)・学会発表(学会)・図書別の一覧表の通し番号を「(論文 1)」のように表記して参照する。

(1)平成 21 年度

本年度は、研究の第 1 段階を進めた。研究を進める過程で、朝鮮半島北部におけるキリスト教の位置づけの大きさがわかり、まずは教会関連資料に着目することが得策であると判断した。そこで、多面的に地域事情を知るために、キリスト教会の伝道拠点(missionary station)が置かれていた地域に絞ることにした。その結果、米国長老派教会が布教していた平安北道の宣川(ソンチョン)、黄海道の載寧(ジェリョン)、カナダ長老派教会（1925 年以降はカナダ連合教会）が布教していた咸鏡南道の咸興(ハムフン)の 3 地区に絞り込むことが有意義であると判断した。なお、2009 年 8 月～2010 年 7 月にかけて、私は在外研究のためハーヴァード燕京研究所を拠点としており、このような研究を有利に進めることができた。本年度の主な調査成果は次のとおりである。

①米国フィラデルフィアにある米国長老派歴史協会で、宣川・載寧に関する宣教師の記録を可能なかぎり網羅的に収集した。
②カナダ・トロントにあるカナダ連合教会文書館で咸興の資料を収集した。また同地では、咸興出身の高齢者へのインタビューを実施した。
③北海道大学図書館にある地域資料を収集した。また、同志社大学人文科学研究所所蔵の朝鮮北部関連資料をマイクロフィルム化して利用可能にした。
④日韓で郡誌をはじめとした基礎的な地域資料を系統的に集めた。
⑤米国・ハーヴァード燕京図書館にある膨大な関連資料を系統的に収集した。

本年度の研究成果としては、⑤の資料を用いつつ、論文(論文 7)を公表し、招待講演(学会 8)を。

(2)平成 22 年度

本年度は、研究の第 2 段階、すなわち具体的な 3 地域（咸鏡南道の咸興、平安北道の宣川、黄海道の載寧）に絞って、当該地域の資料を系統的に収集、整理、解読していくことを中心的な作業とした。2010 年 4～7 月は米

国に滞在していたので北米資料を中心に収集し、8-9 月には韓国で調査を実施、10 月以降はその整理と解読を中心に研究計画を実施した。主な調査成果は次のとおりである。

①咸興地域にプロテスタント・ミッションの拠点を置いていたカナダ連合教会文書がカナダのトロントとハリファックス(ノバスコシア州)に分かれて所蔵されている。トロントでは前年度に資料の状態などを調査したので、本年度は郵送により資料を取り寄せた。ハリファックスのノバスコシア文書館では、宣教師の文書資料のみならず、写真資料、録音資料が所蔵されており、広範囲に収集した。
②ハーヴァード燕京図書館所蔵の関連アーカイブを収集した。
③韓国では、国史編纂委員会にて 3 地域に関わる日本語、ロシア語の資料を収集した。国家記録院では、3 地域に関わる植民地期の官庁文書を収集した。以北五道庁では、1945 年～朝鮮戦争期に南側に渡ってきた「越南者」の資料を収集した。
④アルバイトを雇い、可能な文書をデジタル化する作業を進めた。

本年度の研究成果としては、朝鮮半島北部出身者の記憶の問題を扱った論文(論文 6)、植民地社会研究の回顧と展望を扱った共著論文(論文 5)を公表し、植民地期の地域社会資料をふんだんに用いた学会報告(学会 7)を報告した。

(3)平成 23 年度

本年度の調査を進める過程で、3 つの地域の情報がそれぞれ膨大であり、並行して深く調査を進めるのには明らかに限界があると判断せざるを得なかった。そこで、3 地域のなかで最も大きく、また 1945 年以前において最も資料の豊富であるとともに、1945 年以降にも多面的な資料収集が可能だと認められた咸興(ハムフン)地域に調査対象を限定することにした。そのことにより、主に次のような調査成果を得た。

①韓国江原道の束草(ソクチョ)地域に住んでいる咸興出身者（朝鮮戦争以前に移住してきた者）の団体を訪ね、メンバーのライフヒストリーに関するインタビュー調査を実施した。
②韓国の国家記録院、中央図書館、国史編纂委員会等において咸興に関連した諸資料を調査した。
③1920 年代を中心に咸興に関連した新聞記事を収集した。
④2009-10 年度に北米で収集した宣教文書の整理・読解を進めた。
⑤アルバイトを雇用し、収集資料の整理を進めた。

本年度中に公表された研究成果としては、朝鮮半島北部を含む地域社会で作成された資料を用いた編著所収論文(図書 2)・共著論文(論文 3)、地域社会論を展開した編著所収論文(図書 4)、地方史を叙述ずることの意義を論じた招待講演(学会 5)、朝鮮半島北部出身人物をめぐる記憶の問題を描いた論文(論文 4)およびそれを含む編著(図書 5)および学会報告(学会 6)、1945 年以降の社会史・文化史の研究方法について論じた分担執筆(図書 3)、日本の北朝鮮観に関する学会報告(学会 2)などがある。

(4)平成 24 年度

最終年度は、①咸興地域を中心とした調査データの追加収集ととりまとめるとともに、②これまで調査が進捗していなかった解放後(1945 年～1950 年代)における朝鮮半島北部の社会史的研究に関連した調査を進めた。

①咸興地域のデータとりまとめ：北韓資料センター(ソウル)で、1945～50 年の間に咸興を含む咸鏡南道で発行されていた地方新聞記事を収集した。また、新聞記事データベースにより、1930 年代を中心とする咸興地域に関する記録を可能な限り網羅的に集めた。入手し得る地図の分析を進めるなど、過去 4 年間の収集データを検討し、地域社会史の復元作業を進展させた。
②解放後の北朝鮮社会についての調査：戦後の北朝鮮関連の新聞・公文書や北朝鮮の民俗学者による地方資料収集から地域事情を読み解くことができるため、東京および関西の国立国会図書館、米国のハーヴァード燕京図書館、韓国・国家記録院、滋賀県立大学(朴慶植文庫)、在日韓人歴史資料館(東京)などにおいて系統的に資料収集をおこなった。

本年度中に公表できた研究成果としては、北朝鮮の民俗学に関する研究報告(学会 1, 2)、日本の北朝鮮観に関する前年度の報告に基づいた英語論文(論文 2)、朝鮮半島の地域社会出身者の日記研究(論文 1, 学会 3)、英文による植民地研究レビュー(図書 1)などがあげられる。本研究の中心となった咸興については、これまで収集した資料があまりに膨大であるため、年度内には論文投稿にまでは至らなかったが、可能な限り早く学術論文として公開したいと考えている。

(5)総括および今後の展望

4 年間の研究を通じて、朝鮮半島北部を社会史的に探求することの可能性とともに困

難さを実感せざるを得なかった。当初 3～4 地域を研究する予定だったが、あまりに資料が膨大でデータが多様であるため、咸興地域に限定することになった。それでも咸興は大都市であり、農村の尚州で培った方法がそのまま適用することができなかった。現地調査という方法が用いられないため、土地勘が得にくいという問題もあった。そうした状況においても、キリスト教ミッション文書の広範な発掘、韓国や北米に住む朝鮮半島出身者に対するインタビューをはじめ、貴重なデータを数多く集めることができたのは大きな成果である。

地域社会史研究は、膨大な資料を閲覧し、そのなかにわずかに登場する地域情報を拾っていく時間のかかる作業が不可欠である。そのため、研究期間中に咸興についての研究は残念ながら公表できなかったが、現在投稿のための準備を進めており、はやく学界に成果を還元したい。一方、そのような研究手法であるため、多様な資料に触れることになり、その結果として派生的な研究成果を数多く公表することができたことは、あらためて強調しておきたい。

研究を進めるなか、今後の展望もはっきり見えてきた。咸興については、1950 年代以降の資料も膨大にあることが分かっており、20 世紀後半の研究へと展開し得る。また、北朝鮮の民俗学に着目することの有益さを最終年度に理解したが、これも大きな可能性を秘めている。これらは今後の課題としたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

1. 板垣竜太, 「故郷の夢：在京都朝鮮人留学生日記（1940～43 年）にみる植民地経験」, 『コリア研究（立命館大学コリア研究センター）』, 4, 2013 年, pp. 1-21 (査読無).
2. Itagaki, Ryuta, "North-Korea-phobia in Contemporary Japan: A Case Study of Political Attacks on Korean Ethnic Schools," 『龍谷大学矯正・保護総合センター研究年報』2, 2012 年, pp.76-85(査読無).
3. 板垣竜太, 水野直樹, 「創氏改名時代の族譜：父系出自集団の対応に注目して」, 『韓国朝鮮文化研究（東京大学韓国朝鮮文化研究室）』11, 2012 年, pp.34-74 (査読無).
4. 이타가키 류타,「동아시아 기억의 장소로서 力道山」, 『역사비평（歴史批評）』95 号, 2011 年, pp.127-160(査読有).
5. 板垣竜太, 戸邉秀明, 水谷智,「日本植民地研究の回顧と展望 ：朝鮮史を中心に」, 『社会科学（同志社大学人文科学研究所）』, 88 号, 2010 年, pp. 27-59 (査読有).
6. 板垣竜太, 「〈東アジアの記憶の場〉に向けて：朝鮮史からの視点」, 『歴史学研究』867 号, 2010 年, 57-67 頁(査読有)
7. 板垣竜太, 「日韓会談反対運動と植民地支配責任論：日本朝鮮研究所の植民地主義論を中心に」,『思想（岩波書店）』,1029 号, 2009 年, pp.219-238 (査読無).

〔学会発表〕（計 8 件）

1. 板垣竜太, 「北朝鮮の民俗学における現代性の位相」, 日本文化人類学会・第 47 回研究大会, 2013/6/9, 慶應義塾大学(発表確定).
2. 板垣竜太, 「朝鮮民主主義人民共和国における民俗学の歩み」, 日朝学術研究会・例会, 2013/2/22, 同志社大学.
3. 이타가키 류타, 「꿈속의 고향: 조선인 유학생일기(1940~43 년)를 통해 본 식민지경험」, 国際シンポジウム「個人の伝統と近代」, 高麗大学校民族文化研究院主催, 2012/6/8～2012/6/9, 高麗大学校(韓国ソウル).
4. Itagaki, Ryuta, "North-Korea-phobia in Contemporary Japan: A Case Study of Political Attacks on Korean Ethnic Schools," Panel #100, 2012 Annual Conference, Association for Asian Studies, 2012/3/16, Sheraton Centre Toronto (Toronto, Canada).
5. 이타가키 류타(板垣竜太), 「<지방사>라는 물음(<地方史>という問い)」, 招待講演, 歴史問題研究所, 2011/9/19, 歴史問題研究所(韓国ソウル).
6. Itagaki, Ryuta,, "Places and Holes of Memory: Reflections of Rikidōzan / Yŏktosan / Ryŏktosan", Panel #558, 2011 Annual Conference, Association for Asian Studies, 2011/4/2, Hawai'i Convention Center (Hawai'i, USA).
7. Itagaki, Ryuta, "Cracks of Imperialization: Family Genealogies (*Chokpo*) in Late Colonial Korea, " The 10th Pacific-Asia Conference on Korean Studies, 2010/11/25, University of Auckland (Auckland, New Zealand).
8. Itagaki, Ryuta, "The Politics of "Illicitly Brewed Liquor" in Colonial Korea", 招待講演（Harvard-Yenching Institute Weekly Talk Series ）, 2009/12/11, at Harvard-Yenching Institute (Cambridge, MA, USA).

〔図書〕（計 5 件）

1. Itagaki, Ryuta, Mizutani, Satoshi, and Tobe,

Hideaki, "Japanese Empire," Philippa Levine and John Marriott eds., *The Ashgate Companion to Modern Imperial Histories*, Ashgate, 2012 年, pp.273-299(総頁 738p).
2. Itagaki, Ryuta "Cracks of Imperialization: Family Genealogies (*Chokpo*) in Late Colonial Korea," Changzoo Song ed., *Korean Studies in Shift: Proceedings of the 2010 Pacific Asian Conference on Korean Studies*, 10th Pacific Asian Conference on Korean Studies, 2011 年, pp.441-466 (総頁数 552p).
3. 板垣竜太, 「現代史：社会史・文化史」, 朝鮮史研究会編『朝鮮史研究入門』, 名古屋大学出版会, 2011 年, pp.318-325(総頁 526p).
4. 板垣竜太, 「朝鮮の地域社会と民衆」, 山室信一他編『東アジア近現代通史第 5 巻 新秩序の模索　1930 年代』, 岩波書店, 2011 年, pp.242-261(総頁 391p).
5. 板垣竜太, 鄭智泳, 岩崎稔(編), 『東アジアの記憶の場』, 河出書房新社, 2011 年, 総頁 400p.

６．研究組織

(1)研究代表者

板垣　竜太（ITAGAKI RYUTA）
同志社大学・社会学部・准教授
研究者番号：６０３６１５４９

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし